

2006年度

国際交流基金賞・国際交流奨励賞
授賞式

受賞のことば

2006年度「国際交流基金賞」「国際交流奨励賞」の授賞式が10月3日にホテルオークラ東京で行なわれ、翌日には天皇皇后両陛下の御接見を賜りました。受賞された方々の授賞式でのスピーチをご紹介します。

国際交流基金賞

ジョー&悦子・プライス夫妻 「米国」

Joe & Etsuko Price 財団心遠館代表

ジョー・プライス氏

江戸期の美術を求め
めることは、孤独

な試みではありましたが、しかしながら、私にとって豊かな人生をもたらしてくれました。

実は、何年も前になりますが、妻と私は、伊藤若冲いとうわかむつの金屏風を所蔵する

というお寺に参りました。非常に沈黙に満ちた、広大な広間へ招かれました。

自然の光が障子を通して満ちあふれておりました。雄々しいオンドリが美しい、暗い緑のサボテン（仙人掌）に囲まれて、そこに浮かび上がっております。非常に静かな部屋でありました。

が、この金屏風は、暗い、深い影のなかから浮き出ておりました。私どもを歓迎してくれておりました。

このお寺を訪れていたのは妻と私だけでした。私たちはもう何時間も何時間もくぎづけになつて鑑賞しております。高僧が私たちを見守っております。



国際交流基金賞を受賞したジョー&悦子・プライス夫妻。左は小倉和夫ジャパンファウンデーション理事長



10月5日には京都・ウェスティン都ホテルにても授賞記念レセプションを開催し、150名の来賓が受賞者を祝った。また受賞者らは、京都国立近代美術館で開催されていた「プライスコレクション〜若冲と江戸絵画展」鑑賞や、2005年に新たに開館した京都迎賓館参観なども楽しんだ

国際交流奨励賞・文化芸術交流賞

山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会

〔日本〕

田中 哲氏 山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会会長

山形国際ドキュメンタリー映画祭は、平成元（1989）年、山形市に市制が敷かれて、ちょうど100年目にあたる年に始まりました。それを記念して何かやろうと、当時、いろんな案が出されました。

私は50年ほど、テレビの仕事に関わ

そして私のところにやってきて、おっしゃいました。

「若冲はこう言ったと知られています。何年も先に人々は自分の作品を認めてくれるだろうと」

31万7000名が、長い待ち時間に文句を言うことなく、台風の嵐のなかで行列をなし、そして若冲を見に東京国立博物館に集まってくれました。伊藤若冲、円山応挙、長沢芦雪、曾我蕭白、森狙仙、酒井抱一、鈴木其一、この賞はあなたたちに捧げるものです。どうぞ安心して眠ってください。これはあなたたちの賞なのです。（原文は英語）

悦子・プライス氏 皆様、こんばんは。

—— 本日は、国際交流

基金賞を頂戴し、大変うれしく思っております。そして、お忙しい中、多くの方々にお越しいただき、お祝いをしていたいただきましたこと、深くお礼を申し上げます。

我々はこれからも、日本がいつまでも、いつまでも尊敬される国であり、そして平和な国でありますようにとの思いで、微力ではありますが、日本の文化を海外に伝え続けていきたいと思っております。今晚はほんとうにありがとうございます。

り、ドキュメンタリーソフトの制作を行なっております。小川紳介監督が

山形県上山市牧野でドキュメンタリー映画（『牧野物語・養蚕編』『ニッポン国

古屋敷村』など）を撮影される前、山形に移住するときから協力したことが

あり、それでドキュメンタリー映画祭

を思いつき、提案したわけです。

来年、映画祭はちょうど第10回を迎えます。約20年続いてきた大きな理由には、3つの柱があると思っております。1つは山形市の絶大なる財政的な支援と職員の協力です。そして2つ目は、市民のボランティアの強力な支援

です。隔年で10月の1週間にわたって開催される映画祭ですが、毎日約100名のボランティアがまったくの無償で一生涯懸命働いてくれます。3つ目は東京事務所スタッフの皆さんです。世界中から何百本という映画を集め、セレクトして、日本語の字幕を付したものが山形に送られてきます。この3つの柱があればこそ、この20年が続いてきたのだと改めて感慨深いものがございます。

ドキュメンタリー映画は、普通の記



録映画や科学映画とまた少し意味が違い、制作者の意思なり、感情、思想、主張が入っています。したがって、ドキュメンタリー映画を制作するにも、社会的な問題や国際間の問題があり、国によっては絶対つくれないというところもあります。

私は、この映画祭を通してドキュメンタリー映画を自由につくり、自由に誰でも見られる社会である、この日本の平和で民主的な姿に改めて感動しております。

国際交流奨励賞・日本語教育賞

サンクトペテルブルク国立大学 アジア・アフリカ学部 「ロシア」

Евгений I. Зеленеv 氏 サンクトペテルブルク国立大学 アジア・アフリカ学部長

サンクトペテルブルク国立大学アジア・アフリカ学部を代表いたしました、日本語および日本文化の研究における私どもの努力を、このように評価していただいたことにお礼申し上げますと思います。

1705年、ピョートル大帝の令により初めての日本語学校がサンクトペテルブルクに設立されました。以来、

著名なロシアの学者や教育者は、日本語研究というサンクトペテルブルクの伝統を大切に育て、その原則や思想の発展に努めてまいりました。

過去300年の間、私どもは日本語の講座を提供してきました。また今後私どものプログラムはさらに成長し、繁栄していくものと確信しております。アジア・アフリカ学部では現在、常

勤の教職員が100名います。そのうち教授が36名、準教授が49名で、客員講師もたくさんおります。扱う言語の数は92にも及びます。

学生は東洋の言語の国内および国際的なコンテストでしばしば賞を受賞しております。また、卒業生は、ロシアや他の国々の経済、政治、文化芸術活動にかかわっており、政府や芸術界に

おいても世界中で高い地位についてお
ります。

特に日本語学科、そして日本史学科
は、私どもの優先項目の1つであり、
日本語学科の学生の数も増加しており
ます。

今回の受賞によって日露間の絆がさ
らに強化されるとともに、両国間の相
互理解に貢献するものと私たちは期待
を寄せております。先月、サンクトペ

テルブルクで日本投資フォーラムが開
催されましたが、これは日露間の協力
が重要であること、そしてこれまで以
上に重要になってきていることの表れ
だと思えます。

今回の受賞にあたって、キエフ城所卓雄駐
サンクトペテルブルク日本総領事、そ
してジャパンファウンデーションの皆
さまにお礼申し上げます。

(原文は英語)

国際交流奨励賞・日本研究賞

キム ヨンドク
金容徳氏

〔韓国〕

ソウル大学国際大学院院長

1971年、私は大学院の指導教授
から、日本史を専攻するようにとアド
バイスを受けました。ソウル大学校で
は長年にわたって、日本史講座が空席
のままになっていたからです。

率直に言いますと、私は母の反応を
心配いたしました。母の祖父は日帝に
反対した独立運動のリーダーで、日本
の特高警察の拷問を受けたという悲し
い記憶を持っていたからであります。
ところが、予想に反して、母は前向き

な反応を示してくれました。つまりソ
ウル大学校で日本研究の専門家、しか
も初めての研究者になるのは大変よい
ことだと。韓国人も日本について、も
っと知るべきで、日本に勝つためには
それが必要だと言ってくれたのです。

このようなアンビバレントな気持ち
を持って、私は72年にハーバード大学
へ行き、日本と出会うことになりました
。そこで出会った日本の知識人――
非常に心温かい、そして思慮深い方々



が、私の母の経験とは違う日本の別の
側面を見せてくれました。

アメリカ、日本に滞在するなかで、ま
た韓国でも多くの日本人と出会いまし
た。そして日本は非常に多種多様な
人々の複雑な社会であるということに
気がつきました。

こういった日本の友人の皆様との関
係によって、これまでの否定的なこと、
あるいは痛みを伴う記憶があっても希
望を失うことはない、ということがわ



かるようになったのです。

80年にソウル大学校で初めて日本研究に関する講座が設けられてから、今では様変わりしております。現在は毎学期15の講座があり、7人の専任教授がおります。さらに何人も講師が日本研究に携わっております。

また、ソウル大学校国際大学院でも、日本研究の専門家が育っております。さらにソウル大学校日本研究所のプロジェクトを通して、ソウル大学校の外でも韓国内の人たちが研究活動に携わっております。

これまで、韓国・日本・中国で政治的にさまざまな状況があったがゆえに、韓国における日本研究もさまざまな波

を受けてまいりました。しかし、日本研究はすでにしっかりと根づいていると言えるでありません。

今までの学問的成長および韓国人と日本人の間の善意にあふれた形での関係によって、東アジアはもつとよい将来を迎えることができると思います。私は信じております。私は母の期待のような韓国の日本研究者になったとは思いませんが、歴史家としては過去の間違った行ないを許すことはできる、しかし、歴史を忘れずに、ということ、私は母の期待に応えていきたいと思っております。

一言つけ加えさせていただきますと、最近、私は韓国政府の基金によって新たにつくられた北東アジア歴史財団の理事長に任命されました。北東アジアにおける友好的な関係を阻む歴史問題、また法律上の問題に関する研究を、客観的で体系立った形で進めようというのがこの財団の目的であります。

私は理事長に就任したあとと躊躇することなく今回の賞を受けると決めました。といいますのも、これまでの私の学究的な業績を認めていただくことになるからです。また北東アジア歴史財団が科学的な研究と政策提言を行な

う組織であるというイメージを高めることにもなると感じたからです。

最後に今回の受賞に対して、皆様とジャパンファウンデーションに心から感謝を申し上げます。神が皆様とともにありますように。

(原文は英語)



東京での授賞式にて。右から受賞者の金容徳氏（ソウル大学校国際大学院 院長）、エフゲニー・I・ゼレネフ氏（サンクトペテルブルク国立大学 アジア・アフリカ学部長）、ジョー&悦子・ブライス夫妻（財団心遠館 代表）、田中哲氏（山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会 会長）と小倉和夫ジャパンファウンデーション理事長